

2012年度 修士論文

フラッグフットボールの体育授業満足度と運動  
参加意図に関する研究  
～川崎市の小学生に着目して～

A Study of Flag football PE class Satisfaction and  
Playing intention

The case of elementary school students in Kawasaki City

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5011A007-9

飯塚 啓太  
Iizuka, Keita

研究指導教員： 原田 宗彦 教授

## 目次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 第1章 本研究の意義                        | 6  |
| 第2章 研究背景                          | 7  |
| 第1節 フラッグフットボールの定義と一般的特性           | 7  |
| 第2節 フラッグフットボールとアメリカンフットボールの関係性    | 8  |
| 第3節 フラッグフットボールの教材としての教育的価値        | 9  |
| 第4節 小学校体育授業におけるフラッグフットボールの現状      | 10 |
| 第5節 川崎市におけるフラッグフットボールの現状と問題の所在    | 11 |
| 第3章 先行研究の検討                       | 13 |
| 第1節 体育授業評価に関する先行研究                | 13 |
| 第2節 体育授業満足度に関する先行研究               | 14 |
| 第3節 授業評価と授業満足度の関係に関する先行研究         | 14 |
| 第4節 運動参加意図に関する先行研究                | 15 |
| 第4章 研究の目的と方法                      | 16 |
| 第1節 研究目的                          | 16 |
| 第2節 研究対象                          | 16 |
| 第3節 本研究のフレームワーク                   | 17 |
| 第4節 フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発（調査①） | 18 |
| 第1項 データの収集                        | 18 |
| 第2項 測定項目                          | 18 |

|     |                                      |    |
|-----|--------------------------------------|----|
| 第3項 | 分析方法                                 | 19 |
| 第5節 | 授業評価と授業評価の因果関係（調査②）                  | 21 |
| 第1項 | データの収集                               | 21 |
| 第2項 | 測定項目                                 | 21 |
| 第3項 | 分析方法                                 | 22 |
| 第6節 | 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係（調査③）       | 23 |
| 第1項 | データの収集                               | 23 |
| 第2項 | 測定項目                                 | 23 |
| 第3項 | 分析方法                                 | 23 |
| 第5章 | 結果                                   | 24 |
| 第1節 | フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の分析（調査①）        | 24 |
| 第2節 | 授業評価と授業満足度の因果関係に関する分析（調査②）           | 29 |
| 第3節 | 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係に関する分析（調査③） | 34 |
| 第6章 | 考察                                   | 37 |
| 第1節 | フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度に関する考察（調査①）     | 37 |
| 第2節 | 授業評価と授業満足度の因果関係に関する考察（調査②）           | 40 |
| 第3節 | 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係に関する考察（調査③） | 42 |
| 第4節 | 研究の限界と今後の課題                          | 44 |

|           |    |
|-----------|----|
| 引用文献----- | 48 |
| 資料-----   | 51 |
| 謝辞-----   | 56 |

## 図表目次

|      |                                   |    |
|------|-----------------------------------|----|
| 図 1  | 質問項目と授業満足度のパス図-----               | 32 |
| 図 2  | 各因子と授業満足度のパス図-----                | 33 |
| 表 1  | 本研究のフレームワーク-----                  | 17 |
| 表 2  | 授業評価尺度の質問項目とその項目名（高田ら,2000）-----  | 20 |
| 表 3  | 抽出された授業評価尺度の質問項目-----             | 26 |
| 表 4  | 授業評価尺度の記述統計量-----                 | 27 |
| 表 5  | 授業評価尺度の因子行列と因子の信頼性係数-----         | 28 |
| 表 6  | 授業評価尺度を独立変数とした重回帰分析の結果-----       | 31 |
| 表 7  | 各因子の合成得点を独立変数とした重回帰分析の結果-----     | 33 |
| 表 8  | 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関分析の結果----- | 34 |
| 表 9  | 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の記述統計量-----   | 36 |
| 表 10 | 1 要因分散分析の結果-----                  | 36 |

## 第1章 本研究の意義

本研究は、日本においてマイナースポーツであるアメリカンフットボールの普及と発展に貢献することを本研究の意義とする。先行研究において松岡（2012）は、いわゆるマイナースポーツは、その普及および競技力向上を目指して活動する環境に恵まれているとは言えず、「環境の悪化→競技人口の減少→競技力の低下→行政や企業のサポートの減退→環境の悪化」という負のスパイラルに陥っている。と述べており、日本におけるアメリカンフットボールの現状についても同様である。また、フラッグフットボールが小学校で普及していくのに伴い、「小学校でフラッグフットボールをはじめ、中学校でタッチフットボールを行い、そして高校や大学でアメリカンフットボールを行う」という流れが徐々にできつつある。（松岡，2012）と述べており、フラッグフットボールを普及させることはアメリカンフットボールを普及させる上でも有効な手段である。さらに松岡（2012）は、マイナースポーツが普及する具体的な方策として、この状況から脱却するには、単なる一時的な競技力向上ではなく、底辺拡大のためのこどもへの普及と青少年の競技力向上に長期的に取り組む必要がある。外的な要因として、そのスポーツと出会う機会が学校や地域において必要不可欠であることが伺える。人的、財政的資源不足であれば、普及、強化拠点を絞り込んで、集中的に取り組むことも一つの方策である。と述べており、本研究では、アメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針を行っている川崎市内の小学校で行われているフラッグフットボール体育授業を研究対象とする。これらをふまえて、本研究を進めていくこととする。

## 第2章 研究背景

### 第1節 フラッグフットボールの定義と一般的特性

フラッグフットボールは、これまでアメリカンフットボールを追従する形で発展してきた（宗野, 2012）ため、アメリカンフットボールと類似する点が多いことがいえる。したがって、本研究を進めるにあたって、アメリカンフットボールとフラッグフットボールの相違点を明確にし、フラッグフットボールの定義と一般的特性について言及する。

フラッグフットボールとは、アメリカンフットボールを手軽に、そして安全に楽しむことが出来るニュースポーツ（星尾, 2006）である。または、アメリカンフットボールのタックルを、安全面と判断のしやすさを考慮して、腰につけたフラッグとりにおきかえたフラッグフットボール（平田, 2011）と述べている。したがってフラッグフットボールは、アメリカンフットボールのもつ危険性を排除し、男女や年齢に関係なく誰もが楽しむことができるスポーツである。

フラッグフットボールの一般的特性について、星尾（2006）は、フラッグフットボールとは、通常のアメリカーンフットボールから危険なタックルなどの身体接触プレーを取り除いた攻守混合の陣取りゲームであり、アメリカンフットボールの戦術的な醍醐味を、自分たちでルールや作戦を考え、工夫していくことができる運動である。と述べている。したがって、フラッグフットボールの一般的特性は、安全かつ作戦を遂行することで誰もが活躍することができる頭脳型陣取りゲームである。

## 第2節 フラッグフットボールとアメリカンフットボールの関係性

第1節のフラッグフットボールの定義と一般的特性をふまえると、フラッグフットボールとアメリカンフットボールには共通点があることが明らかとなった。本節では、フラッグフットボールとアメリカンフットボールの関係性について言及する。

川崎市が行っているアメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針では、フラッグフットボールを通じた子どもたちの健全育成・市民の絆の強化について明記していることや、アメリカに存在するアメリカンフットボールプロリーグである NFL (National Football League) が日本におけるアメリカンフットボール普及発展戦略の一環として学校体育で行われているフラッグフットボールに着目したことを考えると、フラッグフットボールとアメリカンフットボールの関係性があることは明確である。

松岡（2012）が行った、子ども・青少年のマイナースポーツの実施環境と関与プロセスの検討で行ったインタビュー調査において、フラッグフットボールが小学校で普及していくのに伴い、「小学校でフラッグフットボールをはじめ、中学校でタッチフットボールを行い、そして高校や大学でアメリカンフットボールを行う」という流れが徐々にできつつある。と述べている。したがって、フラッグフットボールは、アメリカンフットボールやフラッグフットボールの普及発展や裾野の拡大において重要である。

その一方で、フラッグフットボールのこれまでの普及を振り返ると、アメリカンフットボールのレクリエーション・スポーツとして発展してきた経緯は否めない（Inoueら,2010）ことや、フラッグフットボールのスポーツとしての客観的な実態を伴わないままに、アメリカンフットボールの競技特性をなんとなくフラッグフットボールに摩り替えた



だけに過ぎなくなることが危惧される（松元，2010）ことをふまえると，本研究の研究対象である小学校の体育授業におけるフラッグフットボールの特性を明らかにする必要がある．

### 第3節 フラッグフットボールの教材としての教育的価値

フラッグフットボールの教材としての特性と教育的価値に関する研究は，2008年から改訂された小・中学校学習指導要領においてフラッグフットボールが公認の教材となる以前から行われている．平田（2011）は，フラッグフットボールの教材としての価値について，①フラッグフットボールは，試行錯誤をくり返ししながら，作戦をつくり，練習をする過程で，友達と協力することの大切さが分かり，「チームワークの大切さ→友達と協力することの大切さ」を教えることが出来る．②「友達の作り方（対人関係能力）」を「具体的」に教えることができ，学級経営・生徒指導にも役立つという点で，教材価値が高い．と述べている．高橋ら（2005）は，フラッグフットボールの教育的価値として，①鬼遊びの延長線上で楽しめる，やさしい球技である．②だれもが参加でき，一人一人がゲームの中で重要な役割を果たすことができる．③発達段階や能力段階に応じたやさしいゲームを楽しむことができる．④効果的に戦術学習を進めるための最適教材である．⑤みんなで協力して成功する，集団的達成の喜びが味わえる．⑥心と体を一体にする最高のスポーツ教材である．と述べている．小畑ら（2007）は，運動有能感を高める体育授業に関する研究においてフラッグフットボールを題材とし，フラッグフットボールは運動有能感を高める授業づくりの視点から有効な教材であることを明らかにした．さらに小畑（2007）は，運動有能感を高める

ことは生涯体育・スポーツの実践者を育成する上で重要であることから、フラッグフットボールを学校体育で扱うことに価値がある」と述べている。

これらの先行研究から、フラッグフットボールには教材としての教育的価値があることが明らかとなった。次節では、小・中学校学習指導要領の改訂によって公認の教材となった小学校体育授業におけるフラッグフットボールの現状について言及する。

#### 第4節 小学校体育授業におけるフラッグフットボールの現状

2008年から改訂された小・中学校学習指導要領において公認の教材となったフラッグフットボールについて、宗野（2012）は、これまでフラッグフットボールの授業は、ボール操作の技能が比較的容易である、1プレーごとに「ハドル」をすることで立案した作戦を実行しやすいなどといったことで、積極的に戦術学習に取り上げられてきた」と述べている。松元ら（2007）によると、特に小学校体育授業での導入機会の増加は著しく、2007年3月時において、NFL JAPAN および日本フラッグフットボール協会の普及プログラム参加校が2732校、累計で32万人以上の児童や生徒がフラッグフットボールを体験したとされ、教材価値としての高まりとともに、学校体育における授業での積極的な取り組みが広がっている。と述べている。アメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針を行っている川崎市では、平成17年度から市内の小中学校でのフラッグフットボールの教育普及に取り組み始め、平成20年度には、市立小学校115校のうち約半数にあたる57校が授業で採用するなど、中学校、高等学校も含めて急速に採用が進んで来ました（日本フラッグフットボール協会 HP）と述べており、本研究の研究対象である川崎市の小学校では、小学

校体育授業での積極的な取り組みが行われている。

## 第5節 川崎市におけるフラッグフットボールの現状と問題の所在

川崎市が行っている、アメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針（川崎市 HP）には、フラッグフットボールを通じた子どもたちの健全育成と市民の絆の強化について、①フラッグフットボールの推進による子どもたちの健全育成、②フラッグフットボールの拠点化の推進、③フラッグフットボールを通じた市民の交流の推進（川崎市 HP）、と明記されており、フラッグフットボールが市内学校教育の中で定着し、その教育的効果が広く確認・発揮され、フラッグフットボール用のボールが各家庭や学校に広く普及している。と述べている。また年に2回、川崎市教育委員会が主催となって「フラッグフットボール市内交流大会」も開催している（日本フラッグフットボール協会 HP）現状をふまえると、川崎市でのフラッグフットボール環境の充実と普及の可能性があることが考えられる。

その一方で、星尾（2006）は、小学校におけるフラッグフットボールの体育授業を行うにあたって、子どもたちはもとより、教師にとっても初めて取り組む教材である。しかも、取り扱うのがアメリカンフットボールという、わたし自身にとってもそのスポーツそのものがよく理解出来ていないものであることから、指導計画を作成するにあたってはまず教師自身がアメリカンフットボール（フラッグフットボール）について知るところから始まった。と述べている。また、アメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針を行っている川崎市においてもフラッグフットボールを教えることのできる小学校教員がほと

んどいない現状である。

その対策として、川崎市はフラッグフットボール巡回指導というものを年間通じて行っている。フラッグフットボール巡回指導とは、川崎市の市民・こども局に存在する市民スポーツ室に在籍するスポーツ指導支援専門員が中心となって川崎市内の小学校で行われているフラッグフットボール体育授業をサポートするシステムであり、川崎市に存在する大多数の小学校がこのサポートシステムを利用しフラッグフットボール体育授業を行っている。フラッグフットボール巡回指導は、スポーツ指導支援専門員が中心となって依頼を受けた川崎市内の小学校に出向き、フラッグフットボールの授業単元の内、3時間分の授業を教えるものであり、フラッグフットボール体育授業の向上に貢献していると考えられる。しかし、授業単元内の3時間以外の体育授業時間は、小学校教員が他の体育授業同様にフラッグフットボール体育授業を行っており、他の体育授業と比べて生徒たちに安全かつ適切な指導が行われていることは考えづらい。そのため、フラッグフットボール授業改善のためにフラッグフットボール体育授業の授業評価表を作成し、授業満足度の向上をはかる必要があると考えられる。

先行研究において、松岡（2012）は、フラッグフットボールが小学校で普及していくのに伴い、「小学校でフラッグフットボールをはじめ、中学校でタッチフットボールを行い、そして高校や大学でアメリカンフットボールを行う」という流れが徐々にできつつある。と述べており、小学校体育授業を通じてフラッグフットボールを普及させるには、本研究において、フラッグフットボール体育授業満足度の向上と今後のフラッグフットボールに関する運動参加意図についての相関を明らかにする必要があると考えられる。

### 第3章 先行研究の検討

#### 第1節 体育授業評価に関する先行研究

これまでの体育授業に関する研究の中において、体育授業評価に着目した研究の蓄積は数多く見受けられる。高田ら（2003）は、授業の評価は授業改善に向けて多くの意味のある情報を得るために行うものであり、授業改善は、学習者のよりよい学習成果を期待するために行われるはずである。すなわち、学習者にどのような学習成果が習得されたかを判断する情報は、そこで行われた学習指導が効果的であったかどうか、その指導の成否を問うために重要である。と述べており、授業改善のための授業評価尺度の重要性を明らかにしている。

高田ら（1999）が行った、学習者の体育授業に対する態度構造の研究では、各学校段階の体育授業に対する態度構造を因子分析した結果、小学校、中学校、高校、大学のすべての段階で、「まなぶ」「できる」「たのしむ」「まもる」の4つの因子から構成されることが明らかになった。また、高田ら（2000）が行った、態度測定による体育授業評価法の作成の研究において、授業改善のため、より具体的でフィードバック情報が的確に得ることが可能となる授業評価法作成を目的とし、因子分析を行った。結果、「まなぶ」「できる」「たのしむ」「まもる」のそれぞれの因子で5項目ずつ、計20項目の質問項目が小学校、中学校、高校、大学の各学校段階別にそれぞれ抽出された。

これらの体育授業評価の先行研究は、体育授業評価尺度を用いて研究を行っている。本研究においても、これらの先行研究をもとに、フラグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発を行うこととする。

## 第2節 体育授業満足度に関する先行研究

体育授業満足度に関する先行研究は、大学体育に着目したものがいくつか散見される。太田ら（1996）が行った、期待と満足度を用いた尺度による学生体育実技授業評価に関する研究では、マーケティング概念を学校体育教育にも反映させる必要性があると結論づけている。また、笹原ら（2006）は、スポーツ実技(体育実技)授業の満足度に関する質問の回答を因子分析し、授業満足度を目的変数として Logistic 回帰分析を行った。海外においても、大学における体育実技クラスの満足度に関する質問表の発展に関する研究（Cunningham,2007）が存在し、定性、定量分析を実施し、9つの質問項目の抽出した上で、体育授業満足度は、体育実技クラスのインストラクターやプログラムの管理者にとって有効な手段の1つであると結論づけている。これらの先行研究は大学体育授業に関する研究であるため、本研究対象である小学生に应用することは難しいと考える。したがって本研究では、授業評価と満足度の関係に関する先行研究をもとに研究を進めていくこととする。

## 第3節 授業評価と授業満足度の関係に関する先行研究

先行研究において、体育授業評価と体育授業満足度の関係に関する先行研究は見受けられない。したがって、体育授業以外の教科における授業評価と授業満足度の関係に関する先行研究をもとに研究を進めていくこととする。

学生による授業評価と自己評価、成績、及び学生の満足感との関係（牧野、2001）では、授業評価と満足度との間に強い相関がみられ、授業評価が高い学生は満足度も高いと結

論づけている。また、学生による授業評価の規定因の検討(1) (牧野, 2001) では、授業評価因子と満足度との関連において重回帰分析を行った結果、授業内容と教員の授業態度が学生の満足感に大きな影響を与えると結論づけており、授業評価と満足度に関して因果関係があることが明らかとなった。本研究においても、体育授業評価と体育授業満足度に関する因果関係モデルを使用し、研究を進めていくこととする。

#### 第4節 運動参加意図に関する先行研究

学校体育授業と運動参加意図に関する先行研究として、藤田ら (2008) が行った、運動参加意図を予測する中学校体育における動機づけモデルの検討があげられる。先行研究 (藤田ら, 2008) では、中学生を対象とし、運動参加意図に関する質問項目、①夏休み中、自由な時間がある時には、スポーツや運動をしようと思う。②中学校在学中は、体育授業の時間以外にも、スポーツや運動をしようと思う。③ 中学校卒業後、自由な時間があるときにはスポーツや運動をしようと思う。を使用し質問紙調査を行った結果、運動参加意図に対して、内発的動機づけからの正の影響があることが明らかとなった。また藤田ら (2007) が行った、大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけでは、学校卒業後、自ら運動へ参加する者は、体育授業に対して肯定的な運動経験を有することが推測される。と述べており、学校体育授業が生涯体育・スポーツの実践者を育成する上で重要な機会であることが明らかとなった。本研究において、藤田ら (2008) をもとに質問項目を作成し、研究を進めていくこととする。

## 第4章 研究の目的と方法

### 第1節 研究目的

本研究は、①フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発、②フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度とフラッグフットボール体育授業満足度の因果関係を明らかにする。③フラッグフットボール体育授業満足度と今後のフラッグフットボール参加意図の相関関係を明らかにする。を本研究の目的とする。

### 第2節 研究対象

本研究の対象として、川崎市立小学校の中で9月から11月に期間にフラッグフットボールの授業を行ったことのある小学校を研究対象とした。体育授業にてフラッグフットボールを行った小学校が多数存在したため、川崎市教育委員会が各小学校との話し合いのもと、調査協力を得られた小学校3校、計12クラスにて質問紙調査を実施した。また、研究対象である生徒の属性として、川崎市の小学校にてフラッグフットボールの体育授業が行われている小学校3年生以上とし、小学4年生259名、小学校5年生80名、計339名から質問紙を回収した。



### 第3節 本研究のフレームワーク

本研究の目的は、①フラッグフットボール体育授業特有の授業評価尺度の開発、②フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度とフラッグフットボール体育授業満足度の因果関係を明らかにする、③フラッグフットボール体育授業満足度と今後のフラッグフットボール参加意図の相関関係を明らかにする、ことである。本研究のフレームワークは以下の表1の通りである。

表1 本研究のフレームワーク

|      | 調査①                                                                       | 調査②                                       | 調査③                                |
|------|---------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------|
| 日時   | 2012年11月                                                                  | 2012年11月                                  | 2012年11月                           |
| 場所   | 川崎市内の小学校                                                                  | 川崎市内の小学校                                  | 川崎市内の小学校                           |
| 対象者  | 小学4年生96名                                                                  | 小学4年生163名、小学5年生80名、計243名                  | 小学4年生163名、小学5年生80名、計243名           |
| 分析方法 | 探索的因子分析による<br>フラッグフットボール<br>体育授業の授業評価尺<br>度の開発及び因子分析<br>で得られた尺度の信頼<br>性分析 | フラッグフットボール体育<br>授業の授業評価尺度と授業<br>満足度の重回帰分析 | 授業満足度とフラッグ<br>フットボール参加意図<br>との相関分析 |

## 第4節 フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発（調査①）

### 第1項 データの収集

本項では先行研究（高田ら，2000）で使用した授業評価尺度の質問項目をもとに，フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発することを目的とした．調査対象として，川崎市立小学校の中で9月から11月に期間にフラッグフットボールの授業を行ったことのある小学校と選定し，フラッグフットボール体育授業後に質問紙調査を実施した．調査の具体的な方法として，フラッグフットボール体育授業に参加した小学4年生96名を調査対象とし，質問紙の配布方法として，各クラスの担当教諭を通じてフラッグフットボール体育授業後に質問紙調査を実施した．質問紙は96部配布し，すべてから有効回答が得られたため，96部を分析に使用した．

### 第2項 測定項目

測定項目には，高田ら（2000）の先行研究で使用した授業評価尺度の質問項目を加筆・修正して質問項目を作成した．具体的には，先行研究で使用した32の質問項目に存在する「体育」という言葉を「フラッグフットボールの授業」に置き換えた．また，川崎市教育委員会との協議の結果，内容に関して重複する質問項目を削除し，小学生にもわかりやすいワーディング，難しい漢字にはルビを振ることや質問項目の内容を肯定的に修正して得られた28項目を本研究の調査①の質問項目として使用した．川崎市教育委員会から加筆・修正の指示が入った項目として，①小学生にもわかりやすくするため，質問項目に存在する「運動」を「うごき」に変換した．②質問項目（高田ら，2000）に存在する「自分勝手」

や「勝つための手段」の質問項目のように、否定の質問項目を肯定の質問項目に加筆・修正した。③質問項目（高田ら, 2000）に存在する「めあてを持つ」と「適した運動」や「ルールを守る」と「約束事を守る」など重複する内容の質問項目を削除した。である。本研究で使用する 28 の質問項目の因子構造はそれぞれ、まなぶ 10 因子、できる 6 因子、たのしむ 7 因子、まもる 5 因子から構成されており、高田ら（2000）が行った先行研究において、4 つの目標（運動目標、認識目標、社会的行動目標、情意目標）を含んだ因子構造をもつこれらの評価尺度は、授業評価表を作成するにあたり、有効な尺度であることが明らかにされた。と結論づけており、本研究で使用する 28 の質問項目に関して同様な因子構造が存在することから内部妥当性があると考えられる。各項目の回答について、フラッグフットボール体育授業評価を「とてもそう思う」から「全く思わない」を 5 点から 1 点までの得点を与え、等間隔であると仮定し、5 段階のリッカート尺度で測定した。高田ら（2000）が使用した質問項目を表 2、本研究で使用した質問項目を付録 1 として記載する。

### 第 3 項 分析方法

本研究における目的①を明らかにするため、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の質問項目の単純集計による確認、またフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発のために探索的因子分析を行った。因子抽出には、主因子法を用い、バリマックス法による直行回転を実施した。さらに探索的因子分析で抽出された質問項目について、質問項目の信頼性を確認するために内部整合性係数に関してクロンバック  $\alpha$  係数を用いた信頼性分析を行った。なお、すべてのデータ加工及び統計解析には、SPSS Version 21 for

Windows を用いた.

表 2 授業評価尺度の質問項目とその項目名 (高田ら, 2000)

| 質問項目名                                            | 項目名       | 小学生用 | 中学生用 | 高校生用 | 大学生用 |
|--------------------------------------------------|-----------|------|------|------|------|
| 体育では、いろいろな運動が上手にできるようになります                       | いろんな運動の上達 | Q15  | Q2   |      | Q10  |
| わたしは、すこしむずかしい運動でも練習すると出来るようになる自信があります            | できる自信     | Q19  | Q7   | Q1   | Q1   |
| 体育で運動するとき、自分のめあてを持って勉強します                        | めあてを持つ    | Q5   |      | Q15  |      |
| 体育で、ゲームや競争をするときは、ルールを守ります                        | ルールを守る    | Q20  | Q4   | Q2   | Q2   |
| わたしは、運動が、上手にできるほうだと思います                          | 運動の有能感    | Q9   | Q11  | Q16  | Q18  |
| 体育で、他の人が運動しているとき、応援します                           | 応援        |      | Q9   |      |      |
| 体育では、みんなが楽しく勉強できます                               | 楽しく勉強     | Q7   | Q3   | Q13  | Q13  |
| 体育の時、どうしたら運動がうまくできるかを考えながら勉強しています                | 工夫して勉強    | Q3   |      | Q8   | Q16  |
| 体育でならった運動を休み時間や放課後に練習することがあります                   | 時間外練習     | Q12  |      |      |      |
| 体育では、チームで立てた作戦がゲームで成功することがしばしばあります               | 作戦の実践     |      |      |      | Q9   |
| 体育で、グループで作戦をたててゲームや競争をします                        | 作戦を立てる    |      | Q6   |      | Q8   |
| 体育では、自分からすすんで運動します                               | 自発的運動     | Q10  | Q13  | Q4   | Q3   |
| 体育では、いたずらや自分勝手なことはしません                           | 自分勝手      | Q4   | Q18  | Q9   |      |
| 体育がはじまる前は、いつもはりきっています                            | 授業前の気持ち   | Q6   | Q17  |      | Q6   |
| 体育をするとすばやく動けるようになります                             | 俊敏性       |      |      | Q14  | Q14  |
| 体育で、ゲームや競争をするとき、ずるいことやひれつなことをして勝とうと思いません         | 勝つための手段   |      | Q1   | Q6   | Q5   |
| 体育で、ゲームや競争で勝っても負けてもすなおにみとめることができます               | 勝負を認める    | Q14  | Q14  | Q5   | Q4   |
| 体育をすると体がじょうぶになります                                | 丈夫な体      | Q13  | Q5   |      | Q12  |
| 体育で体を動かすと、とてもいい気持ちになります                          | 心理的充足     | Q2   |      | Q11  |      |
| 体育で「あつ、わかった!」、「ああ、そうか」と思うことがあります                 | 新しい発見     |      |      | Q10  | Q11  |
| 体育では、せいっぱい運動することができます                            | 精一杯の運動    | Q17  | Q12  | Q17  | Q20  |
| 体育では、先生の話をきちんと聞いています                             | 先生の話聞く    | Q1   |      |      |      |
| 体育のグループやチームで話し合う時は、自分からすすんで意見をいいます               | 積極的発言     |      | Q20  | Q3   |      |
| 体育をしている時、うまい子や強いチームを見てうまくなるやり方を考えることがあります        | 他人を参考     | Q8   | Q10  |      | Q17  |
| 体育では、わかったと思うこと(知識)を実際に運動に生かすことができます              | 知識を生かす    |      |      | Q18  |      |
| 体育は、ともだちと仲良くなるチャンスだと思います                         | 仲良くなるチャンス |      |      | Q7   | Q7   |
| 体育では、1つの運動がうまくできると、もうすこしむずかしい運動に挑戦しようという気持ちになります | 挑戦意識      |      |      | Q19  |      |
| 体育は、明るくてあたたかい感じがします                              | 明るい雰囲気    | Q11  | Q8   | Q12  |      |
| 体育では、自分の能力に合った運動ができます                            | 適した運動     |      |      |      | Q15  |
| 体育では、クラスやグループの約束ごとを守ります                          | 約束ごとを守る   | Q18  | Q19  | Q20  | Q19  |
| 体育では、ともだちや先生がはげましてくれま                            | 友人・先生の励まし | Q16  | Q15  |      |      |
| 体育では運動がうまくなるための練習する時間がたくさんあります                   | 練習時間      |      | Q16  |      |      |

## 第5節 授業評価と授業満足度の因果関係（調査②）

### 第1項 データの収集

本項では、授業評価と授業満足度の因果関係に関する分析に使用するデータの収集を目的とした。調査対象として、川崎市立小学校の中で9月から11月に期間にフラッグフットボールの授業を行ったことのある小学校と選定し、フラッグフットボール体育授業後に質問紙調査を実施した。調査の具体的な方法として、調査①の時と同様にフラッグフットボール体育授業に参加した小学4年生163名、小学5年生80名を調査対象とし、質問紙の配布方法として、各クラスの担当教諭を通じてフラッグフットボール体育授業後に質問紙調査を実施した。質問紙は243部配布し、すべてから有効回答が得られたため、243部を分析に使用した。調査対象の学年に関して、各学年別にて分析を行った結果、モデルの調整済み決定係数の値が低かったため、本研究では学年別に区分せず分析を進めた。

### 第2項 測定項目

測定項目には、調査①で精査されたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の質問項目、「まもる」4項目、「まなぶ」4項目、「たのしむ」2項目、「できる」2項目の計12項目を設定した。各項目の回答として、調査①と同様に、フラッグフットボール体育授業評価を「とてもそう思う」から「全く思わない」を5点から1点までの得点を与え、等間隔であると仮定し、5段階のリッカード尺度で測定した。またフラッグフットボール体育授業の授業満足度を測定する項目として「あなたは、フラッグフットボールの体育授業に  
かんして、どのくらい満足していますか」という質問文を設定し、「5：とてもそう思う」

から「1：全く思わない」までの5段階リッカート尺度で測定した。

その他、サンプルの特性を明らかにするため、人口統計学的変数と、フラッグフットボールやアメリカンフットボールに関する経験有無に関して「はい」、「いいえ」で回答する質問項目を設定した。フラッグフットボールやアメリカンフットボールに関する経験有無の質問項目として、①これまでに、学校授業以外でフラッグフットボールの試合を見たことはありますか？ ②これまでに、学校授業以外でアメリカンフットボールの試合を見たことはありますか？ ③これまでに、学校授業以外でフラッグフットボールをしたことはありますか？ ④これまでに、学校授業以外でアメリカンフットボールをしたことはありますか？ の4項目として設定した。しかし本研究では、フラッグフットボールやアメリカンフットボールに関する経験有無をダミー変数とし、12項目の質問項目とともに独立変数としたモデルの調整済み決定係数の値が低かったため、調査②の質問項目から除外して分析を進めた。また、本研究で使用する質問項目を調査①と同様に付録1として記載する。

### 第3項 分析方法

本研究の目的②を明らかにするため、調査①で精査されたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の質問項目の単純集計による確認、また調査①で抽出されたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の12項目の質問項目を独立変数、調査②にて設定したフラッグフットボール体育授業の授業満足度に関する質問項目を従属変数とした重回帰分析を行った。なお、すべてのデータ加工及び統計解析には、SPSS Version 21 for Windows を用いた。

## 第6節 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係（調査③）

### 第1項 データの収集

本項では、授業満足度とフラッグフットボール参加意図との相関関係に関する分析に使用するデータの収集を目的した。また調査③に関してのデータ収集は調査②と同時に収集したため、本項では省略することとする。

### 第2項 測定項目

測定項目には、調査②で使用したフラッグフットボール体育授業の授業満足度を測定する項目と、藤田ら（2008）が先行研究で使用した運動参加意図に関する質問項目を元に作成した3項目、①休み中、自由な時間がある時には、フラッグフットボールをしようと思う。②小学校在学中は、体育授業以外にも、フラッグフットボールをしようと思う。③小学校卒業後、自由な時間があるときには、フラッグフットボールをしようと思う。をフラッグフットボール参加意図として設定した。また、本研究で使用する質問紙項目は調査①、②と同様であるため、付録1として記載する。

### 第3項 分析方法

本研究の目的③を明らかにするため、調査②で使用したフラッグフットボール体育授業の授業満足度を測定する項目と、本調査で使用したフラッグフットボール参加意図に関する質問項目3項目をそれぞれに関して相関分析を行った。なお、すべてのデータ加工及び統計解析には、SPSS Version 21 for Windows を用いた。

## 第5章 結果

### 第1節 フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度に関する分析（調査①）

本節では、調査①で得られたデータを用いて行ったフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度に関する探索的因子分析と信頼性分析について説明する。調査①で使用された28項目の質問項目について、主因子法バリマックス回転による探索的因子分析を行った。因子抽出の基準として、高田ら（1999）が行った先行研究において、因子負荷量.40以上で解釈可能な項目であることを選定基準としているため、本研究においても同様に設定した。探索的因子分析の結果、高田ら（2000）が行った先行研究と同様、「まもる」、「まなぶ」、「たのしむ」、「できる」の4因子構造となり、12項目の質問項目が抽出された。抽出された各因子の質問項目として、「まもる」は「Q26：約束事を守る」、「Q20：先生の話聞く」、「Q11：自分勝手」、「Q14：勝つための手段」の4項目、「まなぶ」は「Q8：作戦の実現」、「Q23：知識を生かす」、「Q9：作戦をたてる」、「Q22：他人を参考」の4項目、「たのしむ」は「Q24：仲良くなるチャンス」、「Q6：たのしく勉強」の2項目、「できる」は「Q4：運動の有能感」、「Q2：できる自信」の2項目となった。次に、調査①で得られたデータを用いて行った探索的因子分析によって抽出された12項の質問項目の信頼性を確認するために内部整合性係数に関してクロンバック $\alpha$ 係数を用いた信頼性分析を行った。信頼性分析の結果、全因子の合計点数の $\alpha$ 係数が0.89となった。この結果は、高田ら（2000）の先行研究において行われた信頼性分析の結果である0.80以上の基準を満たしている。また、先行研究の信頼性分析の結果をふまえて、高田ら（2000）は、授業評価尺度としての一次元性が確保され、尺度としての信頼性が得られたといえる。と述べており、



探索的因子分析で抽出されたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度は信頼性があることが明らかとなった。さらに、高田ら（2000）の先行研究と同様に、各因子についても信頼性分析を行った結果、 $\alpha$  係数は「まもる」因子が 0.83, 「まなぶ」因子が 0.84, 「楽しむ」因子が 0.67, 「できる」因子が 0.68 となった。先行研究における各因子の関する信頼性分析の結果について、高田ら（2000）は、 $\alpha$  係数は 0.6022～0.7861 の値を示し、各因子についても信頼性が得られた。と結論づけており、探索的因子分析で抽出されたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度に存在する各因子についても信頼性があることが明らかとなった。なお、抽出された授業評価尺度の質問項目、授業評価尺度の記述統計量及び授業評価尺度の因子行列と信頼性係数の結果を表 3, 4, 5 として記載する。

表 3 抽出された授業評価尺度の質問項目

| 質問項目名               | 質問項目                                                  |
|---------------------|-------------------------------------------------------|
| Q2（出来る自信：できる）       | わたしは、すこしむすかしいうごきでも練習すると出来るようになります                     |
| Q4（運動の有能感：できる）      | わたしは、フラッグフットボールが上手にできるほうだと思います                        |
| Q6（楽しく勉強：たのしむ）      | フラッグフットボールの授業では、みんなが楽しく勉強できます                         |
| Q8（作戦の実現：まなぶ）       | フラッグフットボールの授業では、チームで立てた作戦がゲームで成功することがあります             |
| Q9（作戦をたてる：まなぶ）      | フラッグフットボールの授業では、グループで作戦をたててゲームや競争をします                 |
| Q11（自分勝手：まもる）       | フラッグフットボールの授業では、いたずらや自分勝手ことをせず、みんなと協力します              |
| Q14（勝つための手段：まもる）    | フラッグフットボールの授業で、ゲームや競争するとき、正々堂々と勝とうと思います               |
| Q20（先生の話聞く：まもる）     | フラッグフットボールの授業では、先生の話をきちんと聞いています                       |
| Q22（他人を参考：まなぶ）      | フラッグフットボールの授業をしている時、うまい子や強いチームをみてうまくできるやり方を考えることがあります |
| Q23（知識を生かす：まなぶ）     | フラッグフットボールの授業では、わかったと思うこと（知識）を実際にうごきに活かすことができます       |
| Q24（仲良くなるチャンス：たのしむ） | フラッグフットボールの授業では、ともだちと仲良くなるチャンスだと思います                  |
| Q26（約束事をまもる：まもる）    | フラッグフットボールの授業では、クラスやグループの約束ごとをまもります                   |

表 4 授業評価尺度の記述統計量

| 質問項目                 | 平均値  | 標準偏差 | 分析 N |
|----------------------|------|------|------|
| Q2 (出来る自信：できる)       | 4.04 | 1.19 | 96   |
| Q4 (運動の有能感：できる)      | 3.71 | 1.19 | 96   |
| Q6 (楽しく勉強：たのしむ)      | 4.42 | .85  | 96   |
| Q8 (作戦の実現：まなぶ)       | 4.08 | 1.14 | 96   |
| Q9 (作戦をたてる：まなぶ)      | 3.88 | 1.17 | 96   |
| Q11 (自分勝手：まもる)       | 4.34 | .89  | 96   |
| Q14 (勝つための手段：まもる)    | 4.28 | 1.10 | 96   |
| Q20 (先生の話聞く：まもる)     | 4.31 | 1.00 | 96   |
| Q22 (他人を参考：まなぶ)      | 3.95 | 1.17 | 96   |
| Q23 (知識を生かす：まなぶ)     | 3.97 | 1.12 | 96   |
| Q24 (仲良くなるチャンス：たのしむ) | 4.02 | 1.23 | 96   |
| Q26 (約束事を守る：まもる)     | 4.28 | .89  | 96   |

表 5 授業評価尺度の因子行列と信頼性係数

| 因子名  | 質問項目                 | 因子  |     |     |     | $\alpha$ |
|------|----------------------|-----|-----|-----|-----|----------|
|      |                      | 1   | 2   | 3   | 4   |          |
| まもる  | Q26(約束事をまもる：まもる)     | .74 |     |     |     | .83      |
|      | Q20 (先生の話聞く：まもる)     | .74 |     |     |     |          |
|      | Q11 (自分勝手：まもる)       | .60 |     |     |     |          |
|      | Q14 (勝つための手段：まもる)    | .59 |     |     |     |          |
| まなぶ  | Q8 (作戦の実現：まなぶ)       |     | .75 |     |     | .84      |
|      | Q23 (知識を生かす：まなぶ)     |     | .64 |     |     |          |
|      | Q9 (作戦をたてる：まなぶ)      |     | .61 |     |     |          |
|      | Q22 (他人を参考：まなぶ)      |     | .58 |     |     |          |
| たのしむ | Q24 (仲良くなるチャンス：たのしむ) |     |     | .68 |     | .67      |
|      | Q6 (楽しく勉強：たのしむ)      |     |     | .67 |     |          |
| できる  | Q4 (運動の有能感：できる)      |     |     |     | .76 | .68      |
|      | Q2 (出来る自信：できる)       |     |     |     | .45 |          |

因子抽出法：主因子法・バリマックス回転

## 第2節 授業評価と授業満足度の因果関係に関する分析（調査②）

本節では、調査②で得られたデータを用いて行った授業評価と授業満足度の因果関係に関する分析について説明する。調査①で得られたフライングフットボール体育授業の授業評価に関する4因子12項目からなる授業評価尺度とフライングフットボール体育授業の授業満足度との因果関係を検討するため、授業評価尺度を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析を行い、因果関係を明らかにした（表6）

重回帰分析の結果、採択されたモデルにおいて、授業満足度に対する調整済み決定係数は.30 ( $p<.01$ ) であった。また12項目からなる授業評価尺度の内、たのしむ因子に存在する「Q24：仲良くなるチャンス」と「Q6：楽しく勉強」の2項目に関してのみ、標準偏回帰係数がそれぞれ5%と1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。したがって、たのしむ因子に存在する「Q24：仲良くなるチャンス」と「Q6：楽しく勉強」の2項目は、授業満足度に対して正の関係で有意であり、これらの2項目を高く評価するほど授業満足度が高いことが明らかとなった。（図1）

次に、調査①で得られたフライングフットボール体育授業の授業評価に関する4因子と授業満足度の因果関係を検討するため、開発された授業評価尺度に存在する各因子の合成得点を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析を行い、因果関係を明らかにした。（表7）

重回帰分析の結果、採択されたモデルにおいて、授業満足度に対する調整済み決定係数は.30 ( $p<.01$ ) であった。また存在する4因子の内、4項目から構成されるまなぶ因子と2項目から構成されるたのしむ因子の2因子に関して、標準偏回帰係数がそれぞれ5%と1%

水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。したがって、まなぶ因子とたのしむ因子の 2 因子は、授業満足度に対して正の関係で有意であり、これらの 2 因子を高く評価するほど授業満足度が高いことが明らかとなった。（図 2）

表 6 授業評価尺度を独立変数とした重回帰分析の結果

| 説明変数                 | $\beta$ |
|----------------------|---------|
| Q26 (約束事を守る：まもる)     | .06     |
| Q20 (先生の話聞く：まもる)     | .10     |
| Q11 (自分勝手：まもる)       | -.04    |
| Q14 (勝つための手段：まもる)    | -.01    |
| Q8 (作戦の実現：まなぶ)       | .03     |
| Q23 (知識を生かす：まなぶ)     | .05     |
| Q9 (作戦をたてる：まなぶ)      | .10     |
| Q22 (他人を参考：まなぶ)      | .08     |
| Q24 (仲良くなるチャンス：たのしむ) | .14 *   |
| Q6 (楽しく勉強：たのしむ)      | .25 **  |
| Q4 (運動の有能感：できる)      | .08     |
| Q2 (出来る自信：できる)       | -.03    |
| R <sup>2</sup>       | .33 **  |
| Adj R <sup>2</sup>   | .30 **  |
| 標本数 (N)              | 243     |

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数, \*\*:p<.01, \*:p<.05

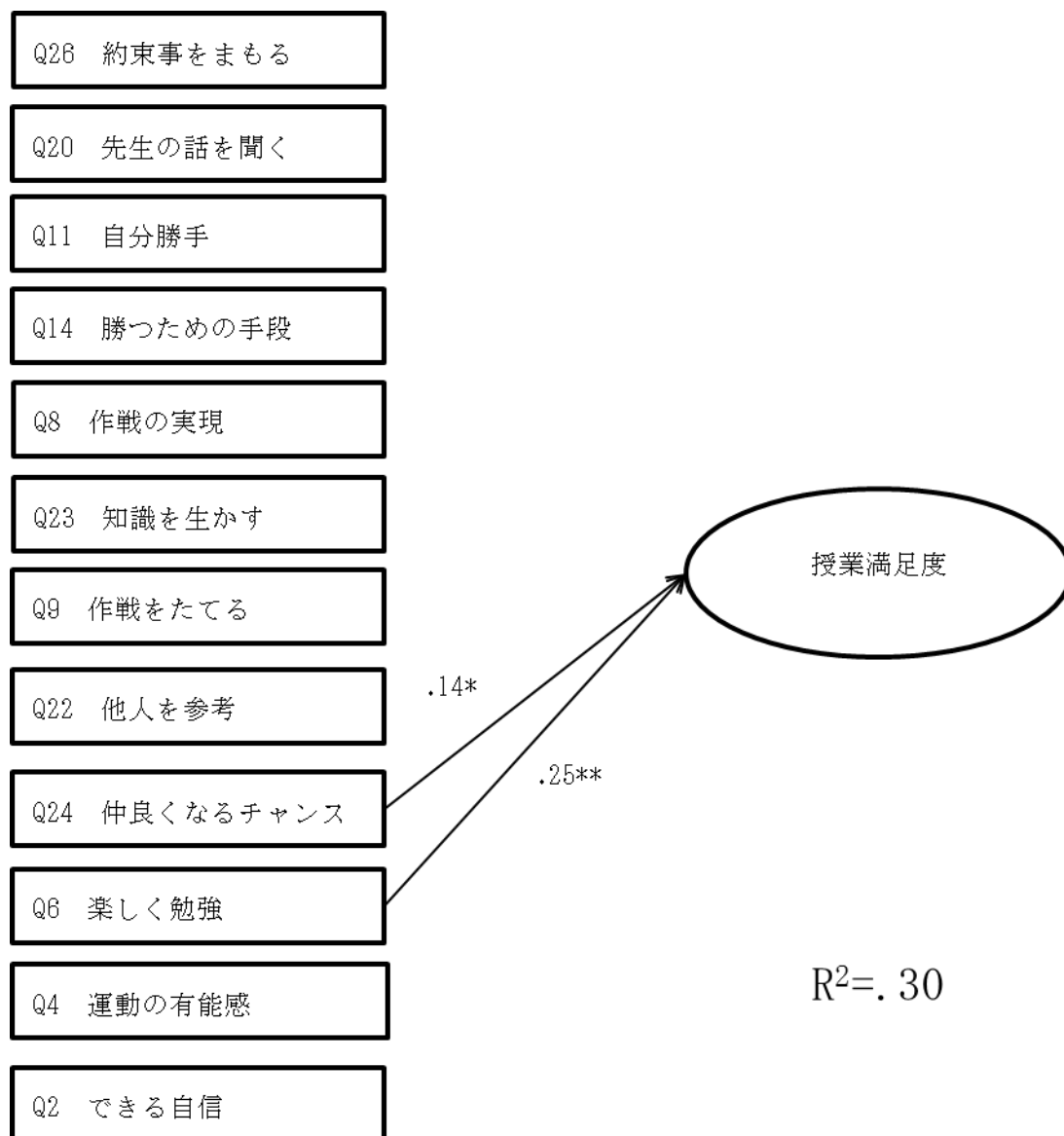


図1 質問項目と授業満足度のパス図（有意なパスのみ図示. \*\*:p<.01, \*:p<.05 N=243）



表 7 各因子の合成得点を独立変数とした重回帰分析の結果

| 説明変数（因子名） | $\beta$ |
|-----------|---------|
| まもる       | .11     |
| まなぶ       | .17 *   |
| たのしむ      | .33 **  |
| できる       | .03     |
| $R^2$     | .31 **  |
| Adj $R^2$ | .30 **  |
| 標本数 (N)   | 243     |

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数, \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

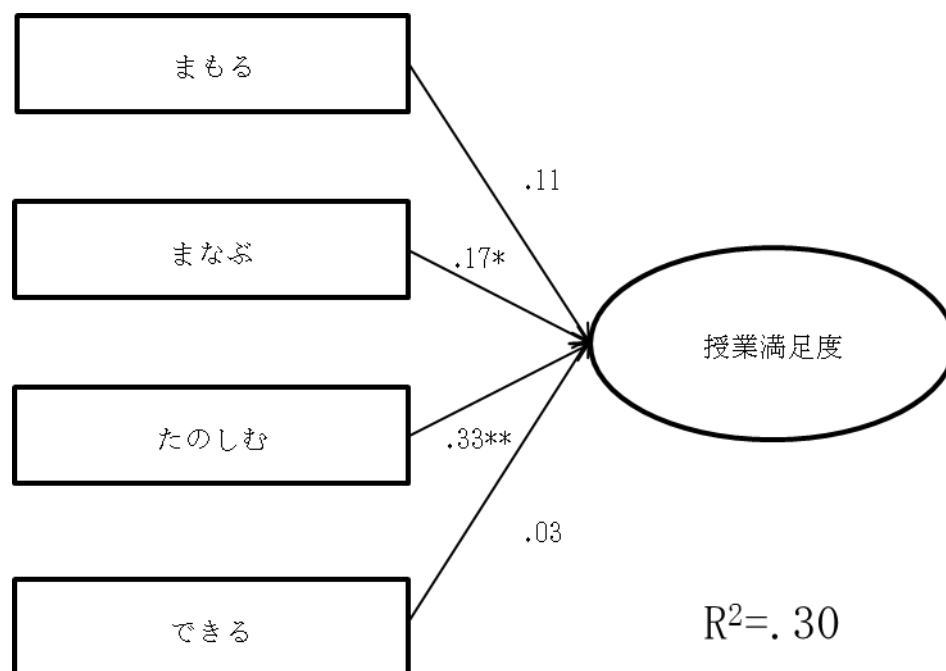


図 2 各因子と授業満足度のパス図 (\*\*: $p < .01$ , \*: $p < .05$  N=243)

### 第3節 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係に関する分析（調査③）

本節では、調査②で得られた授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係について説明する。相関分析の結果、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係において、フラッグフットボール参加意図に関する3項目すべてにおいて1%水準で有意であった。また有意であった3項目すべてにおいて正の相関を示し、相関係数は3項目のそれぞれ、「休み中、自由な時間がある時には、フラッグフットボールをしようと思う。」は（ $r=.44$ ）、「小学校在学中は、体育授業以外にも、フラッグフットボールをしようと思う。」は（ $r=.43$ ）、「小学校卒業後、自由な時間があるときには、フラッグフットボールをしようと思う。」は（ $r=.42$ ）という結果となった。（表8）

表8 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関分析の結果

| フラッグフットボール参加意図に関する質問項目                 | n   | r     |
|----------------------------------------|-----|-------|
| 休み中、自由な時間がある時には、フラッグフットボールをしようと思う。     | 243 | .44** |
| 小学校在学中は、体育授業以外にも、フラッグフットボールをしようと思う。    | 243 | .43** |
| 小学校卒業後、自由な時間があるときには、フラッグフットボールをしようと思う。 | 243 | .42** |

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$

それぞれの質問項目の記述統計量に着目してみると、「休居中、自由な時間がある時には、フラッグフットボールをしようと思う。」は 2.53 (n=243) , 「小学校在学中は、体育授業以外にも、フラッグフットボールをしようと思う。」は 2.73 (n=243) , 「小学校卒業後、自由な時間があるときには、フラッグフットボールをしようと思う。」は 2.43 (n=243) , 授業満足度は 3.90 (n=243) という結果となった。フラッグフットボール参加意図の質問項目は相関係数において 3 項目の差はほとんど見られなかったが、記述統計量では在学中におけるフラッグフットボール参加意図が 2.73 と、もっとも高い数値を示した。(表 9)

さらに、フラッグフットボール参加意図に関する 3 項目の質問項目の平均値に差があるかを比較検討するため、対応のある 1 要因分散分析を行った。その結果、 $F(2,484) = 12.18$ ,  $p < .01$  となり、これらの質問項目に主効果が認められた。Bonferroni 法による多重比較の結果、在学中におけるフラッグフットボール参加意図は、他の 2 項目に対して有意に高いことが明らかとなった。(表 10)

表 9 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の記述統計量

|                   | 平均値  | 標準偏差 | n   |
|-------------------|------|------|-----|
| フラッグフットボール参加意図休み中 | 2.53 | 1.30 | 243 |
| フラッグフットボール参加意図在学中 | 2.73 | 1.32 | 243 |
| フラッグフットボール参加意図卒業後 | 2.43 | 1.32 | 243 |
| 授業満足度             | 3.90 | .98  | 243 |

表 10 1 要因分散分析の結果

| フラッグフットボール参加意図    | n   | 平均値  | 標準偏差 | F       |
|-------------------|-----|------|------|---------|
| フラッグフットボール参加意図休み中 | 243 | 2.53 | 1.30 | 12.18** |
| フラッグフットボール参加意図在学中 | 243 | 2.73 | 1.32 |         |
| フラッグフットボール参加意図卒業後 | 243 | 2.43 | 1.32 |         |

\*\*p<.01

## 第6章 考察

本研究は、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度を用いて、フラッグフットボール体育の授業満足度との因果関係を明らかにし、また授業満足度とフラッグフットボール参加意図との相関関係を明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度を開発し、授業評価と授業満足度との因果関係及び授業満足度とフラッグフットボール参加意図との相関関係について定量的に把握することが出来た。本研究の考察として次のような解釈を得た。

### 第1節 フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度に関する考察

本節では、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発に関して考察する。先行研究（高田ら、2000）をもとに作成した28項目の質問項目について探索的因子分析を行った結果、12項目がフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度として抽出された。通常、体育授業評価を行う際に使用する質問項目数は各因子5項目ずつ計20項目で構成されているが、本研究においても先行研究と同様に質問項目を抽出する因子負荷量の基準として.40以上で行った結果、4因子計12項目となった。抽出された各因子の質問項目として、「まもる」は「Q26:約束事を守る」、「Q20:先生の話聞く」、「Q11:自分勝手」、「Q14:勝つための手段」の4項目、「まなぶ」は「Q8:作戦の実現」、「Q23:知識を生かす」、「Q9:作戦をたてる」、「Q22:他人を参考」の4項目、「たのしむ」は、「Q24:仲良くなるチャンス」、「Q6:たのしく勉強」の2項目、「できる」は「Q4:運動の有能感」、「Q2:できる自信」の2項目となった。

それぞれの因子の質問項目に着目してみると、「まもる」因子として抽出された 4 項目、「できる」因子として抽出された 2 項目、「たのしむ」因子として抽出された 1 項目「Q6：たのしく勉強」と「まなぶ」因子として抽出された 1 項目「Q22：他人を参考」の計 8 項目に関して、星尾（2006）が行った先行研究の質問項目に存在していることから、本研究における質問項目としての妥当性があることが明らかとなった。

その中でも「できる」因子に存在する「Q4：運動の有能感」の項目について、小畑ら（2007）は、技能的にやさしいことや一人一人に役割があること、集団的達成感を得られることなどのフラッグフットボールの特性が運動有能感に影響を及ぼした．と述べており、本研究においても質問項目として抽出された．また小畑ら（2007）は、体育授業では、運動有能感を高める視点で授業づくりを行うことが、生涯体育・スポーツを実践者育成につながる．と述べており、授業評価尺度をもとにした授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係を明らかにした本研究において、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の質問項目として重要であることが明らかとなった．

「まなぶ」因子に関して、「Q8：作戦の実現」と「Q9：作戦をたてる」の 2 項目がフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度として抽出された．先行研究において、フラッグフットボールの教材としての教育的価値についての研究は数多く散見され、フラッグフットボールの戦術学習モデルの効果と検討（岡出ら，2007）など戦術や作戦に関する研究も存在する．平田（2011）は、フラッグフットボールは、作戦づくりや、その作戦をゲームで試すという具体的な実践を通じて、客観的な「作戦」と「ゲーム」の分析能力が身に付き、「話し合い」の重要性、自分が「主人公」になる喜びだけでなく、「献身的な役割の尊

さ」を、具体例を通して教えられる点で、教材価値が高い．と述べており、「Q8:作戦の実現」と「Q9：作戦をたてる」の2項目は、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度において必要不可欠な質問項目であることが明らかとなった．

単純集計による記述統計量の観点から探索的因子分析の結果を分析してみると、「たのしむ」因子に存在する項目「Q6：たのしく勉強」が4.42と授業評価としてもっとも高い数値であった．星尾（2006）は、フラッグフットボール授業後に「たのしむ」という因子の得点が高まったことは、これまであまり体育を楽しめなかった子どもたちがフラッグフットボールの学習では比較的楽しめたということが見て取れる．と述べている．また先行研究（星尾，2006）においても「Q6：たのしく勉強」の項目が3段階尺度にて2.69と高い数値であることから、本研究においても先行研究と同じ結果が得られたことが明らかとなった．

次に高い数値を示した質問項目として、「Q11：自分勝手」が4.34、「Q20：先生の話聞く」が4.31、「Q26：約束事をまもる」が4.28、「Q14：勝つための手段」が4.28、とすべて「まもる」因子に存在する質問項目であった．これらの要因として、川崎市が年間を通じて行っているフラッグフットボール巡回指導が考えられる．フラッグフットボール巡回指導は、スポーツ指導支援専門員が中心となって依頼を受けた川崎市内の小学校に出向き、フラッグフットボールの授業単元の内、3時間分の授業を教えるものであり、フラッグフットボール体育授業の向上に貢献していると考えられる．フラッグフットボール巡回指導では、スポーツ指導支援専門員たちが毎单元ごとに写真や表を使用して約束事やルールの説明を行っているため、本研究において、「まもる」因子に存在する質問項目が高い

数値を示したと考えられる。しかし、フラッグフットボール巡回指導を利用し、主にフラッグフットボール体育授業を行っているのは、小学校の教諭ではなく、小学校から依頼を受けたスポーツ指導支援専門員たちである。したがって、生徒たちはいつもと違った環境の中で体育授業を行うこととなり、いつも以上に緊張感をもってフラッグフットボール体育授業に参加したことについても考慮するべきである。

探索的因子分析によって抽出された 12 項目のフラッグフットボール体育の授業評価尺度の信頼性を確認するために内部整合性係数に関してクロンバック  $\alpha$  係数を用いた信頼性分析を行った結果、全因子の合計点数の  $\alpha$  係数が 0.89 となった。また各因子についても信頼性分析を行った結果、 $\alpha$  係数は、「まもる」因子が 0.83, 「まなぶ」因子が 0.84, 「楽しむ」因子が 0.67, 「できる」因子が 0.68 となった。

これらの結果は、高田ら（2000）の先行研究で使用された信頼性分析の基準を満たしていることから、本研究で開発された 12 項目のフラッグフットボール体育の授業評価尺度は信頼性があることが明らかとなった。

## 第 2 節 授業評価と授業満足度の因果関係に関する考察

本節では、12 項目からなるフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度と授業満足度にどのような因果関係があるかを考察する。12 項目から構成される授業評価尺度を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析では、従属変数の説明力を表す調整済み決定係数の値は.30 となった。この値が.30 ということは、授業評価尺度と授業満足度の因果関係モデルとして授業満足度の変動を 30 パーセント説明していることになる。次に、フラッ



グフットボール体育授業の授業評価に関する 4 因子を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析では、従属変数の説明力を表す調整済み決定係数の値は.30 となり、授業評価尺度を独立変数して行った重回帰分析と同じ値を示した。牧野（2001）が行った先行研究において、授業評価と満足度の因果関係を検討するために行った重回帰分析では、調整済み係数の値は.40 であり、本研究で得られた調整済み決定係数の値よりも高い数値を示した。本研究では、調査対象の小学生の理解度に考慮して質問項目をすべてポジティブな内容に修正したことで分散が狭くなったことにより、先行研究の調整済み決定係数の値を下回った一要因であると考えられる。また、授業満足度の結果に関して、分析で使った 243 部のデータの内、72 パーセントにあたる 175 部において「4：やや満足」が 105 部、「5：とても満足」が 70 部存在しており、標準偏差に関しても.98 となっていることも分析に影響したと考えられる。

これらをふまえて、どの授業評価尺度の質問項目が授業満足度に影響を及ぼしているかを明らかにする必要がある。授業評価尺度を独立変数とした重回帰分析の結果から「たのしむ」因子に存在する「Q6：たのしく勉強」と「Q24：仲良くなるチャンス」の2項目が、標準偏回帰係数がそれぞれ5%と1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であることが明らかとなった。次に、フラグフットボール体育授業の授業評価に関する4因子を独立変数とした重回帰分析では、存在する4因子の内、4項目から構成されるまなぶ因子と2項目から構成されるたのしむ因子の2因子に関して、標準偏回帰係数がそれぞれ5%と1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。星尾（2006）は、フラグフットボール授業に参加する児童の実態として、フラグフットボールは、子どもたちにとってほとんどなじ

みのないスポーツであり、そのもととなるアメリカンフットボールもほとんどの子どもにとっても未知なスポーツである。と述べている。また、子どもたちは未知のものに対して、どちらかという否定的な思いを持つ傾向にあり、初めての出会いを「楽しそうだぞ」と思いに結びつけていることが重要である（星尾, 2006）と結論づけている。したがって、体育授業の満足度を向上させるための具体的な方策として、クラスみんなでコミュニケーションをとれる機会を確保し、協力をしながらたのしいフラッグフットボール授業行うことに重点をおいた指導に取り組んでいくことがあげられる。また、授業評価に関する4因子を独立変数とした重回帰分析において有意であったまなぶ因子について、星尾（2006）は、フラッグフットボールは作戦により運動能力の差を克服出来るという良さを持っている。と述べていることから、フラッグフットボール体育授業の満足度の向上をはかるための具体的な方策として、作戦の立案と実行に重点をおき、クラスみんなが学びやすい環境のもとフラッグフットボール授業を進めていくことがあげられる。

### 第3節 授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係に関する考察

本節では、授業満足度とフラッグフットボール参加意図がどのような相関関係があるかを考察する。相関分析の結果、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係において、フラッグフットボール参加意図に関する3項目すべてにおいて1%水準で有意であった。また有意であった3項目すべてにおいて、相関係数が.40を超えており、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係が正の相関を示した。したがって、因果関係までは言及できないが、授業満足度を向上させることによって、フラッグフットボール

参加意図を促す可能性があることが示唆された。また、それぞれの質問項目の記述統計量に着目してみると、授業満足度は 3.90 と高い数値を示し、フラッグフットボール参加意図の質問項目は相関係数において 3 項目の差がほとんど見られなかったが、記述統計量では在学中におけるフラッグフットボール参加意図が 2.73 ともっとも高い数値を示した。さらに、フラッグフットボール参加意図に関する 3 項目の質問項目の平均値に差があるかを比較検討するため、対応のある 1 要因分散分析を行った。その結果、 $F(2,484) = 12.18, p < .01$  となり、これらの質問項目に主効果が認められた。Bonferroni 法による多重比較の結果、在学中におけるフラッグフットボール参加意図は、他の 2 項目に対して有意に高いことが明らかとなった。

この結果をもとに川崎市におけるフラッグフットボールの現状をふまえると、フラッグフットボール環境の充実と普及の可能性がある。フラッグフットボールの普及として小学校を拠点とした活動を積極的に行っていく必要がある。松岡（2012）は、フラッグフットボールが小学校で普及していくのに伴い、「小学校でフラッグフットボールをはじめ、中学校でタッチフットボールを行い、そして高校や大学でアメリカンフットボールを行う」という流れが徐々にできつつある。とフラッグフットボールと関係性があるアメリカンフットボールについて述べていることから、小学校体育授業以外の場でフラッグフットボールをできる環境の整備をすることが重要である。具体的な方策として、小学校の休み時間や放課後の時間に体育授業で使用しているフラッグフットボール用のボールの使用を許可することや、小学校で行われているクラブ活動にフラッグフットボールクラブを設置することがあげられる。また松岡（2012）は、アメリカンフットボールについて、今後部活動

が盛んになるのは現実的ではないので、社会人チームや大学が拠点となって、総合型地域スポーツクラブのような組織のなかにチームができていくことが理想である．と述べていることから、日本社会人アメリカンフットボールリーグである X リーグに所属するチームや大学アメリカンフットボール部が普及活動の一環としてフラッグフットボールチームを運営することや、川崎市のように行政が中心となって、小学校以外の場所においてもフラッグフットボールを行う環境の整備をしていくことが重要である．

#### 第 4 節 研究の限界と今後の課題

本研究では、フラッグフットボール体育授業の授業評価をもとにした授業満足度とフラッグフットボール参加意図の関係性における示唆を得た．しかしながら、本研究で使った質問項目等に関して更なる検討が必要である．

まず 1 点目として、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の再検討の必要性である．先行研究の質問項目を元に作成した授業評価尺度について探索的因子分析を行った結果、4 因子 28 項目から 4 因子 12 項目が抽出された．通常、体育授業評価を行う際に使用する質問項目数は各因子 5 項目ずつ計 20 項目で構成されているが、本研究においても先行研究と同様に質問項目を抽出する因子負荷量の基準として .40 以上で行った結果、4 因子計 12 項目となった．また本研究では、探索的因子分析の結果、先行研究と同様の因子構造かつ同じ質問項目が 8 項目存在したことから質問項目の妥当性があるとして研究を進めた．その後の信頼性分析においても、基準の .80 以上であったことから信頼性が確認された．しかし、サンプル数の兼ね合いから抽出された質問項目の妥当性を確認するための確認的

因子分析を実施出来なかったことや、探索的因子分析によって基準である 20 項目より質問項目が減少したことをふまえると、本研究におけるフラグフットボール体育授業の授業評価尺度の再検討の必要があると考える。具体的な方策として、十分なサンプル数を確保し、授業評価尺度に関して再度探索的因子分析を行い、妥当性の確認として確認的因子分析を行うことが望まれる。

2 点目として、授業評価と授業満足度の因果関係モデルの再検討の必要性である。探索的因子分析から抽出された授業評価に関する 12 項目を独立変数とし、授業満足度を従属変数として行った重回帰分析では、従属変数の説明力を表す調整済み決定係数の値は 0.30 となった。次に、開発された授業評価尺度に存在する各因子の合成得点を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析では、従属変数の説明力を表す調整済み決定係数の値は 0.30 となり、授業評価に関する 12 項目を独立変数とした重回帰分析と同じ値を示した。授業満足度に影響を及ぼす項目に着目してみると、12 項目からなる授業評価尺度の内、たのしむ因子に存在する「Q24：仲良くなるチャンス」と「Q6：楽しく勉強」の 2 項目に関してのみ、標準偏回帰係数がそれぞれ 5%と 1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。次に、授業評価尺度に存在する 4 因子の内、4 項目から構成されるまなぶ因子と 2 項目から構成されるたのしむ因子の 2 因子に関して、標準偏回帰係数がそれぞれ 5%と 1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。しかし、本研究におけるモデルの説明力がともに 30%しかない。また、授業満足度に影響を及ぼす因子として、それぞれ「たのしむ」因子の 2 項目と「まなぶ」因子、「たのしむ」因子の 2 因子のみであり、その質問項目の影響度も低いことをふまえると、本研究における授業評価と授業満足度の因果関

係モデルの再検討の必要があると考える。具体的な方策として、十分なサンプル数を確保し、確認的因子分析によって妥当性が得られたフラッグフットボール体育授業の授業評価尺度を用いた重回帰分析を行うことがあげられる。また、本研究では、フラッグフットボールやアメリカンフットボールに関する経験有無をダミー変数とし、12 項目の質問項目とともに独立変数としたモデルの調整済み決定係数の値が低かったため、質問項目から除外して分析を進めた。しかし、フラッグフットボールがマイナースポーツである以上、フラッグフットボールやアメリカンフットボールに関する経験をした小学生を対象とした定性的研究も今後の研究で行っていく必要があると考えられる。

3 点目として、研究対象の選択である。本研究では、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関分析を行うため、フラッグフットボール環境の充実と普及の可能性がある川崎市内の小学校にてフラッグフットボール体育授業を行った小学生を研究対象とした。相関分析の結果、フラッグフットボールに関する 3 項目すべてにおいて 1%水準で有意であり、相関係数も.40 以上の値を示し、正の相関が明らかとなった。しかし、本研究が 1 つの事例研究であったことは事実であり、相関係数の結果についても、アメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針としてフラッグフットボールを積極的に推進している川崎市内にある小学校を研究対象とした結果であることも考慮する必要があると考えられる。今後は、川崎市以外でフラッグフットボール体育授業を行っている小学生についても調査を行い、川崎市内の小学生と比較していくことが望まれる。

4 点目として、小学生を対象とした質問紙調査についてである。本研究では、川崎市教育委員会との協議を行い、内容に関して重複する質問項目を削除し、小学生にもわかりや

すいワーディング，難しい漢字にはルビを振ることや質問項目の内容を肯定的に修正して質問項目を選定した．しかし，質問項目が30項目を超えていることや限られた授業時間内で質問紙調査が行われたことを考えると，本研究では正確な質問紙調査が行われたとは考えづらい．今後，学校体育を研究対象として質問紙調査を行う際には考慮すべき点である．さらに，本研究では，サンプル数の兼ね合いから調査対象であった小学生の学年を統一することが出来なかった．各学年別にて分析を行った結果，モデルの調整済み決定係数の値が低かったため，本研究では学年別に区分せず分析を進めたが，学年ごとに学習指導要領に違いがあるため，1つの学年を対象とした調査を行うことが望ましいと考える．

最後に，フラッグフットボールの普及に関する今後の課題について言及する．小・中学校学習指導要領において，フラッグフットボールが公認の教材となった現在，体育授業を通じてフラッグフットボールを普及していくには，フラッグフットボール体育授業に対する小学校教諭の意識改革が必要不可欠であると考ええる．小学校教諭としてもまったく経験したことのないスポーツであることから，体育授業で教えるということに抵抗があることは明らかではあるが，本研究をもとにフラッグフットボール体育授業を進めていき，できるだけ多くの小学生たちが体育授業においてフラッグフットボールに興味・関心を抱くことを強く望んでいる．

## 引用文献

- George B. Cunningham (2007) Development of the Physical Activity Class Satisfaction Questionnaire (PACSQ) , Measurement in Physical Education and exercise Science Vol.11 Issue 3, pp.161-176
- Inoue Y., Seifried C., Matsumoto T (2010) American football development in Japan. A study of National Football League strategies, International Journal of Sport Management Vol. 11 Issue 2, p.248-272
- 太田あやこ, 加納弘二, 浦田憲二, 杉山仁志, 星川秀利 (1996) 期待と満足度を用いた尺度による学生の体育実技授業評価, 大学体育 Vol.23 No.2, 103-110
- 岡出美則, 劉静波, 吉永武史, 鬼澤陽子, 小松崎敏 (2007) 戦術学習モデルの効果の検討—小学校におけるフラッグフットボールの授業分析を通じて—, スポーツ教育学研究 Vol.27 No.1, pp.37-50
- 小畑治, 岡澤祥訓, 石川元美 (2007) 運動有能感を高める体育授業に関する研究—フラッグフットボールの授業実践から—, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 No.16, pp.123-130
- 川崎市 HP (<http://www.city.kawasaki.jp/index.html>)
- 笹原妃佐子, 大岩雅子, 河村誠, 笹原英夫 (2006) 大学における体育の意義について, 大学体育学 Vol.3 No.1, pp.15-23
- 杉原隆(1995)運動・スポーツの阻害要因に関する調査研究報告書. 健康・体力づくり事業財団:東京



- 宗野文俊（2012）フラッグフットボールの発展段階に関する一考察—アメリカンフットボールの発展段階を踏まえて—北海道大学大学院教育学研究院紀要 Vol.115, pp.93-121
- 高田俊也, 岡沢祥訓, 高橋健夫（1999）学習者の体育授業に対する態度構造の研究—態度構造からみる学習指導の在り方の検討—, スポーツ教育学研究 Vol.19 No.1, pp.27-38
- 高田俊也, 岡沢祥訓, 高橋健夫（2000）態度測定による体育授業評価法の作成, スポーツ教育学研究 Vol.20 No.1, pp.31-40
- 高橋健夫（2003）体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—明和出版
- 高橋健夫, 岡出美則, 松元剛（2005）子どもが育つフラッグフットボール, 全日本フラッグフットボール協会
- 日本フラッグフットボール協会 HP (<http://www.japanflag.org/>)
- 平田和孝（2011）みんながタッチダウンするフラッグフットボールの指導, 創文企画
- 藤田勉, 佐藤善人（2010）小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較検討, 鹿児島大学教育学部研究紀要・人文社会科学編, pp.43-59
- 藤田勉, 杉原隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ, 体育学研究 Vol.52, pp.19-28

- 藤田勉, 森口哲史, 徳田清信, 溝田さと子, 山下健浩, 浜田幸史 (2008) 運動参加意図を予測する中学校体育における動機づけモデルの検討, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, pp.21-31
- 星尾尚志 (2007) 小学生体育におけるフラッグフットボールの教材化に関する研究, 京都教育大学教育実践研究紀要, pp.71-80
- 牧野幸志 (2001) 学生による授業評価と自己評価,成績,及び学生満足感との関係—教養選択科目「社会心理学」の場合—高松大学紀要 Vol.35, pp.1-16
- 牧野幸志 (2001) 学生による授業評価の規定因の検討(1)—多変量解析を用いた因果モデルの検討—高松大学紀要 Vol.36, pp.55-66
- 松岡宏高(2012)こども・青少年のマイナースポーツの実施環境と関与プロセスの検討, SSF スポーツ政策研究第 1 巻 1 号, pp.251-260
- 松元剛 (2010) フラッグフットボールの競技特性に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要 Vol.33, pp.69-76
- 松元剛, 岡出美則, 吉永武史, 高橋健夫(2007)フラッグフットボールの教育的価値, フットボールの科学 2(1):10-16

## 資料

資料 本調査で使用された質問紙

### フラッグフットボール授業についての調査

小学校 年 男・女

しつもん1、 これまでの体育で行われたフラッグフットボールの授業を思い出して、 下の

質問に答えてください。 あなたの考えにもっとも当てはまる数字に○をしてください。

5-----4-----3-----2-----1

とてもそう思う ややそう思う どちらでもない あまり思わない まったく思わない

1. フラッグフットボールの授業では、いろいろなごきが上手にできる 5-----4-----3-----2-----1

ようになります

2. わたしは、すこしむずかしいごきでも練習すると出来るようになる 5-----4-----3-----2-----1

自信があります

3. フラッグフットボールの授業で運動するとき、自分のめあてを持って 5-----4-----3-----2-----1

勉強します

4. わたしは、フラッグフットボールが、上手にできるほうだと思います 5-----4-----3-----2-----1

5. フラッグフットボールの授業で、他の人が運動しているとき、応援 5-----4-----3-----2-----1

します

6. フラッグフットボールの授業では、みんなが楽しく勉強できます 5-----4-----3-----2-----1

7. フラッグフットボールの授業でならったごきを休み時間や放課後に 5-----4-----3-----2-----1

練習することがあります

8. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業では、チームで立てた作<sup>さくせん</sup>戦がゲームで 5-----4-----3-----2-----1  
成<sup>せいこう</sup>功することがしばしばあります
9. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業で、グルー<sup>さくせん</sup>プで作戦をたててゲームや 5-----4-----3-----2-----1  
競<sup>きょうそう</sup>争をします
10. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業では、自分からすす<sup>じぶん うんどう</sup>んで運動します 5-----4-----3-----2-----1
11. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業では、いたずらや自分勝手<sup>じぶんかって</sup>なことはせず、 5-----4-----3-----2-----1  
みんなと協力します
12. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業がはじまる前<sup>まえ</sup>は、いつもはりきっていま 5-----4-----3-----2-----1  
す
13. フラッグフットボールをするとすばやく動<sup>うご</sup>けるようになります 5-----4-----3-----2-----1
14. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業で、ゲームや競<sup>きょうそう</sup>争をするとき、 5-----4-----3-----2-----1  
正<sup>せいせいどうどう か おも</sup>々堂々と勝とうと思います
15. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業で、ゲームや競<sup>きょうそう</sup>争で勝<sup>か</sup>っても負<sup>ま</sup>けても 5-----4-----3-----2-----1  
すなおにみとめることができます
16. フラッグフットボールをすると体がじょうぶになります 5-----4-----3-----2-----1
17. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業で体<sup>うご</sup>を動かすと、とても気持<sup>きも</sup>ちがいいで 5-----4-----3-----2-----1  
す
18. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業で「あっ、わかった!」、 「ああ、そう 5-----4-----3-----2-----1  
か<sup>おも</sup>」と思うことがあります

19. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>では、せいいっぱい運動することができ  
ます 5-----4-----3-----2-----1
20. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>では、先生の話<sup>はな</sup>をきちんと聞いています 5-----4-----3-----2-----1
21. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>のグループやチームで話し合う時は、  
自分<sup>じぶん</sup>からすすんで意見<sup>いけん</sup>をいいます 5-----4-----3-----2-----1
22. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>をしている時、うまい子や強いチームを  
見<sup>み</sup>てうまくできるやり方を考えることがあります 5-----4-----3-----2-----1
23. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>では、わかつたと思うこと（知識）を実  
際<sup>じ</sup>にうごきに活かすことができます 5-----4-----3-----2-----1
24. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>は、ともだちと仲良<sup>なかよ</sup>くなるチャンスだと  
思<sup>おも</sup>います 5-----4-----3-----2-----1
25. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>は、明るくてあたたかい感<sup>かん</sup>じがします 5-----4-----3-----2-----1
26. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>では、クラスやグループの約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>ごとをま  
もります 5-----4-----3-----2-----1
27. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>では、ともだちや先生がはげましてくれ  
ます 5-----4-----3-----2-----1
28. フラッグフットボールの授<sup>じゅぎょう</sup>業<sup>うんどう</sup>ではうごきがうまくなるための練<sup>れん</sup>習<sup>しゅう</sup>  
時間<sup>じかん</sup>がたくさんあります 5-----4-----3-----2-----1

しつもん2、あなたは、体育授業<sup>じゅぎょう</sup>以外でフラッグフットボールをしてみたいと思いますか？

5-----4-----3-----2-----1

とても<sup>おも</sup>う思う やや<sup>おも</sup>う思う      どちらでもない      あまり<sup>おも</sup>わない      まったく<sup>おも</sup>わない

1. 休み中、自由な時間<sup>じゆう じかん</sup>がある時には、フラッグフットボールをしようと 5-----4-----3-----2-----1

おも  
う

2. 小学校在学中<sup>ざいがくちゅう</sup>は、体育授業<sup>じゅぎょう</sup>以外にも、フラッグフットボールをし 5-----4-----3-----2-----1

おも  
う

3. 小学校卒業後<sup>そつぎょうご</sup>、自由な時間<sup>じゆう じかん</sup>があるときには、フラッグフットボールを 5-----4-----3-----2-----1

おも  
う

しつもん3、あなたは、フラッグフットボールの体育授業<sup>じゅぎょう</sup>にかんして、どのくらい満足<sup>まんぞく</sup>していますか？

5-----4-----3-----2-----1

とても<sup>まんぞく</sup>満足 やや<sup>まんぞく</sup>満足      どちらでもない      あまり<sup>まんぞく</sup>満足してない      まったく<sup>まんぞく</sup>満足してない

しつもん4、あなたについてしつもんします。 はい、 いいえ、 のどちらかに○をしてください。

これまでに、がっこうじゅぎょういがい 学校授業以外でしあい み フラッグフットボールの試合を見たことはありますか？ (はい、 いいえ)

これまでに、がっこうじゅぎょういがい 学校授業以外でしあい み アメリカンフットボールの試合を見たことはありますか？ (はい、 いいえ)

これまでに、がっこうじゅぎょういがい 学校授業以外でフラッグフットボールをしたことはありますか？ (はい、 いいえ)

これまでに、がっこうじゅぎょういがい 学校授業以外でアメリカンフットボールをしたことはありますか？ (はい、 いいえ)

さいごに、 フラッグフットボールについてのかんそうをかいてください。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

## 謝辞

今から約3年前。大怪我を機にプロアメリカンフットボール選手を引退した私は、自分のセカンドキャリアについて悩みを抱いていました。当時、母校のコーチに就任した私は、「日本におけるアメリカンフットボールの普及と発展に貢献するには、どうしたらよいのか」と考えるようになりました。大学院での2年間の研究生生活を通じて、私は知見が広がり、今までとは違った観点で日本におけるアメリカンフットボールについて考えることが出来るようになりました。今まで競技者として生きてきた私にとって、スポーツビジネス分野を研究することは非常に有意義であったと確信しています。それは、まわりの人の支えなくして経験することは出来ませんでした。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきます。

まず、日々のご指導、ご鞭撻頂きました原田宗彦先生には厚く御礼申し上げます。原田先生のご理解なくして、私の大学院生活とコーチ生活の両立は考えられませんでした。

また、修士論文の執筆にあたり副査をお引き受け頂きました木村和彦先生、吉永武史先生にも深く御礼申し上げます。先生方のアドバイスにより、修士論文を更に改善することが出来ました。

突然の申し出にもかかわらず、修士論文の調査に快く協力していただいた、川崎市教育委員会の杉本眞智子さんと助川昌志さん、フラッグフットボール巡回指導に同伴させていただいた金井由明さん、質問紙調査に協力していただいた川崎市の小学校関係者の皆さんと小学生の皆さん、本研究は皆様の協力をなくして実現することは出来ませんでした。心より御礼申し上げます。引き続きフラッグフットボール巡回指導を通じて、少しでも



お手伝いさせて頂きたいと思っております。

私が 2 年間における研究生生活が続けることが出来たのは、ともに切磋琢磨することが出来た仲間の存在があったからです。親身になってアドバイスをしていただいた原田研究室在籍の野地俊夫さん、博士後期課程の石井十郎さん、押見大地さん、松井くるみさん、柴田恵理香さん、福原孝之さん、伊東克さん、深堀理一郎さん、先輩方のおかげで修士論文を執筆することが出来ました。本当にありがとうございます。同じ研究室の後輩として研究に協力してくれた修士課程 1 年の安藤絵里奈さん、喜多なつみさん、辛文さん、田中浩基さん、科目等履修生の助川智洋さんにも感謝申し上げます。又、原田研究室の OB・OG の皆さん、原田ゼミの後輩の皆さんをはじめ、私をサポートしてくださったすべての方々に感謝申し上げます。

最後になりましたが、この 2 年間をともにがんばってきた同期の新井萌さん、田中いづみさん、兵頭陽さん、山下玲さん、本当にありがとうございました。5 人で過ごした 2 年間はかけがえのない時間でした。これからの人生もみんなとともに歩んでいきたいと思います。

2012 年 1 月 11 日

飯塚 啓太